

研究プロジェクト総合報告
研究プロジェクト論文

学際的英語教育方法の実践的考察

高 橋 玲

同志社女子大学・薬学部・医療薬学科・特任教授

Practical Study of Interdisciplinary English Teaching Methods

TAKAHASHI Rei

Department of Clinical Pharmacy, Faculty of Pharmaceutical Sciences,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Special appointment professor

Abstract

An interdisciplinary approach to teaching common and shared English in DWCLA was explored to determine its usefulness and possible application as a means of enhancing students' incentive to learn English. A gathering of a small number of students from multiple faculties was set up as a base for free participation. It was expected that students of various faculties would accept health and medical themes. The methods used were as follows. We investigated the differences in English vocabulary of each student using corpus analysis. The method in prosody was applied to improve the students' hearing skills, which allowed them to recognize inaudible or altered sounds. Some theoretical hints were obtained from "A book of five rings," written by a Japanese warrior long ago. The entity behind a word would be realized by learning a scenario or script of the word as if imagining a constellation from a flock of stars. These findings and the trial outcomes may provide a clue as to the evolution of our English teaching system on campus.

1 はじめに

異なる学部学生間の交流による「学際的 interdisciplinary」な英語学習の場を学内に設置し、共通英語教育プログラム開発に有用な情報を収集することを目的とする研究である。教育背景の異なる学生間の相互作用を最大限に引き出すために、少人数自由参加型の英語サロンによる英語学習を試行し、そこから得られる英

語の背景に存在することばの背景にある script の共有とは何かについて考察する。学生間の相互作用を最大限に引き出すために、少人数の学生が集まる学びの空間を設定した。具体的には次の3つの点を考慮して行われた。1) 教育的背景の異なる他学部学生の集まりに適した英語ボキャブラリーを比較調査することによって、教材の選択や作成につなげる。2) 異なる学部学生間の相互作用から生まれてくる交流を

Liberal Arts を学ぶ機会として捉える。3) グローバルな話題を積極的に設定することによって、国際主義的感覚を養う。参加対象者として、同志社女子大学および大学院の学生および教員であれば、学部学科・学年を問わず参加できることとした。

2 結果・考察

2.1 英語サロンの実践を振り返って

English 2020の活動の一環として行われた英語サロンでの具体的な活動を簡単に振り返り、いくつかの点について考察する。集まりの呼び名は、「みんな de 英語サロン」と命名して、少人数の学習環境を設定することにした¹⁾。取り扱う話題【テーマ】は、誰でも参加できるという観点を重視して、共通性の高い生命・健康・疾病などを取り扱うのが効果的と判断し、初回は「HIV/AIDS」をテーマとした²⁾³⁾。学習時間は1コマ90分で行った。第1ラウンドでは、3ヶ月かけて16コマ行われ、学生の参加人数は、医療薬学12名、看護学科が5名の合計17名であった。引き続き第2ラウンドは2ヶ月間に11コマ行われ医療薬学科5名、看護学科5名の合計10名が参加した。HIV/AIDSを取り扱った動画や印刷物からの教材を選択する際には、専門的過ぎるコンテンツは避けるようにし、動画は5分以内のコンパクトなものに限った。

2.2 学習方法の検討

英語学習の基本的なステップとして一般的に用いられている次の要素を取り入れた。それらは1) General listening, 2) Specific listening, 3) Mumbling, 4) Dictation/Analyzing, 5) Phrase reading, 6) Prosody transcribing, 7) Lip sync, 8) Overlapping, 9) Shadowingである。初歩的な段階1) General listeningから9) Shadowingに向かって難易度の傾斜したプログラムとした。ここで注目したいのは、精神 spirit と身体 body のバランスである。1) ~ 6) では、大脳機能、すなわち精神的 spiritual なトレーニングによって達成される。

それに対して7) Lip sync, 8) Overlapping, 9) Shadowing では、精神的制御 spiritual control を受けている身体活動 speaking activity を徐々に解き放つステップであると考えた。8) Overlapping ではスクリプトを目で追いながら行うが、9) Shadowing では基本的にスクリプトを見ずに行われる。これを別な角度から見ると、「話す speak」という身体活動を精神的統制から切り離す過程と見なすことができる。次の英文は、宮本武蔵が剣術の極意を記した「五輪書」⁴⁾の中の「水の書 The water book」において、精神 spirit と身体 body の独立性を説いている箇所である。「Do not let your spirit be influenced by your body, or your body be influenced by your spirit.」ことばを発声する際にはしばしば無意識であり、精神による抑制から解放されることで円滑に行われると考えられる。

2.3 ボキャブラリー多様性の解析

語彙の多様性について考えるために教材²⁾の一部で言及すべき語を次に示した。

We explain HIV and AIDS. The human (1) immune system defends the body against illnesses all the time. It uses guards in the blood called (2) T-cells to recognize any (3) intruders and destroy them. But instead of attacking the body, the human (4) immunodeficiency virus, or HIV, attacks those T-cells themselves. It turns them into copy machines to make more copies of itself, then (5) eventually kills the infected T-cells. Without (6) treatment, it takes 8 years on average for a person with HIV to (7) develop AIDS or (8) Acquired Immunodeficiency Syndrome. By then, there aren't enough T-cells to (9) fight off various infections and diseases. So, it's not the virus directly, but the diseases, that are eventually (10) fatal.

たとえば、下線部(1) human immune system ヒトの免疫系統、(2) T-cells T細胞、(4) immunodeficiency 免疫不全、(6) treatment 治療、(8) Acquired Immunodeficiency Syndrome 後天性免疫不全症候群 (AIDS) (7) develop 発症、は医療用語であり、医療系学生には日本語訳を付記するのみでよい。ところが、医療分野の知識のない学生には、「T細胞」、「免疫」についての追加説明が必要であろう。一方、(3) intruder 侵入、(5) eventually 最終的には、(9) fight off 撃退する、(10) fatal 致命的な、の単語は日本語訳を付記するのみでそれ以上の説明は不要であろう。また、医学分野での「acquired」は「congenital 先天性」に対して生後に獲得されたという意味から「acquired 後天性」と訳される。異なる学部の学生の背景知識の違いを前もってキャッチすることが、学習効果の向上には不可欠である。ここでは、コーパス corpus の有効性に注目したい。以前、我々は New England Journal of Medicine の Case Records を読むために必要な語彙を知るために、コーパス解析を行った⁵⁾⁶⁾⁷⁾。過去10年分(約450症例)の英文から全単語を集積してコーパス解析したところ、おおよそ700の医学単語を一般的な語彙に加えるのみで十分であるという結果が得られている。

2.4 Prosody 分析について

ヒアリングスキルを向上させるポイントのひとつは、聞こえない音を知ることにある。発していない音は決して聞くことはできないが、聞こえないものの存在を認識することが必要であり、それを学ぶには Prosody 分析が効果的である。下記の英文は、「HIV Lesson for Kids」³⁾を用いて Prosody transcribing した例である。音声の「脱落・連結・同化」に着目し、脱落する音を () で示し、連結・同化する音を [] で示した。これらを意識して発音できるようになった時点で、学生のヒアリングスキルは格段に向上した。

The bloo(d) contain(s) cells whi[ch are]

like small soldiers. The small soldiers ha[ve an im]portan(t) role in your body protecting agains(t) diseases such as pneumonia, col(d), flu an(d) diarrhea. An(d) it will hel[p you] grow an(d) become stronger. When something tha(t) shouldn(t) be there gets into the bloo(d), the body gets ill an(d) will no(t) [let you] grow properly.

ここで「五輪書」⁴⁾の「地の書 The ground book」には、「Perceive those things which cannot be seen. Pay attention even to trifles.」見えないものを感じて、些細なことにも注意を払うとあるが、これを英語の発音に置き換えてみると、聞こえないサウンドに耳を傾け、わずかな気配を感じることになる。Prosody 分析のみではなく、音声に対する感性を磨くことも見落としてはならない。

2.5 星から星座へ Stars in a constellation

言語学習の過程は、無秩序のように見える夜空の星 stars から星座を想像することに例えることができる。医学の世界では、症状や身体徴候、検査結果からまとまった疾患や病態を推定していくことを「constellation of the findings」と表現する。しかし、射手座を認識するには射手とはどのようなものかを知らなくして、星座を楽しめない。すなわち、英語の背景にある実体を共有しているという前提が必要である。そう考えると、ことばの背景には物語(シナリオ)があるはずである。たとえば、医療関係者は、「疾患のシナリオ(筋書き)」を illness script⁸⁾を持っている。たとえば、患者が diabetes mellitus(糖尿病)であると聞いただけで、頭の中にはその illness script、すなわち糖尿病患者の顔貌、体型、検査結果、合併症、治療、予後など疾患の筋書きがすぐに浮かんでくるはずだ。シナリオと英語を平行して同時に学んでいく流れはすでに行われている。たとえば、生命科学の学びと英語教育のコラボを模索する試みが行われている⁹⁾。「汎用的英語

運用能力と生命科学の学びを連動させた授業手法の創意工夫が報告されている。

3 おわりに

新しいことばに出会った時に、今までの自己の経験から連想できるものにつなぎ止めておくという作業、つまり寄り道こそが script を作る作業に他ならない。共通の script が頭の中に浮かびあがれば、あとは共鳴を起こす英語を発して受け取るだけでよい。いろいろな波長の音に反応する共鳴板を持ち合わせるためにも、Liberal Arts の充実は欠かせない。Script を求めて Liberal Arts の世界をワクワクしながら探索する喜びを分かち合いたい。

参考文献・情報源

- 1) 飯田毅、成橋和正、橋本秀実、今井由美子、佐伯林規江、高橋玲、若本夏美、松中みどり (2018) 「本学の教育理念及び Vision 150を活かした共通英語教育開発のための基礎研究—1年目のまとめと考察」同志社女子大学総合文化研究所紀要35巻、45-81.
- 2) 「HIV and AIDS -explained in a simple way」
<https://www.youtube.com/watch?v=DzXgCW9YcNg&t=1s>
- 3) 「HIV Lesson for Kids」
https://www.youtube.com/watch?v=O_MWGVkC1kQ
- 4) Victor Harris (1974) 「A book of five rings by Musashi Miyamoto」The Overlook Press
- 5) 高橋玲、松中みどり (2007) 「トップジャーナルの症例集で学ぶ医学英語」アルク
- 6) 高橋玲 (2010) 「トップジャーナルの症例集を用いた医学英語勉強会の試み」
J. Medical English Education Vol.1 No.9 p48-51.
- 7) 高橋玲 (2010) 「キクタンメディカル」アルク
- 8) Katherine Gavinski, MD, Yvome Covin, MD, Palma J. Longo, PhD
「Learning how to build illness scripts」
(2019) Academic Medicine, Vol.94(2), p293.
- 9) 佐藤賢一、近藤寿人、岸川淳一 (2017) 「生命科学の学びを豊かにするための英語のよい教育を模索する」京都産業大学高等教育フォーラム 7巻、77-82.